

1983年 12月10日

《每月 10 日、25 日發行》

第 51 号 4頁 150円

定期購読料(1部22回)

手渡し 3000円 / 開封 3500円 / 密封 4000円

赫 旗

共産主義者同盟中央機関紙

発行 赤路社

東京都大田区大森北 1-13-11
電話 (03) 766-4729 東京 7-86947
編集・発行人 北沢 晋

関西赤路社
大阪市福島区大開 1-19-13
副島ビル 電話(06)462-7030



秋期闘争の成果かため
越冬・自主基盤勝利へ

秋期闘争の成果

今秋期 レーガン来日訪韓阻止闘争は八〇年代中期に至る八三年の最大の課題として問われ国際国内級闘争の重要な攻防環をめぐる闘いとして位置していた。

米帝の頭目レーガンのアジア歴訪は、フィリピン人民の決起を始めとした韓国民衆、アジア人民の軍事独裁政権打倒、米日帝への闘いによつて、訪れ、ASEAN歴訪を頓挫させられたわが国の労働者階級人民の闘いは、この世界にまき起る反帝・反日帝への闘いと同様の質の闘いを「層鮮明に」闘かつていことが問われた。

そして何により注目すべきは、こうした闘いに先きたち、レーガン来日に合せた十・二十六天皇公園開園式典に抗議し、立川市職青婦部の一時間ストライキが闘われたことである。

この政治ストは、十一月三・四日の天皇右翼暴力団と運動し

問われた課題

た権力による予防反革命攻撃による四、五数万人のぼろ大弾圧に抗議し、赤い翼を闘い続ける全協山嵐義闘団の闘いへ波及し、そして、十一・九、ゼネロ芳組の堺・川崎、東京支部で早朝一時間の政治ストライキへと発展した。

まさに今秋レーガン来日を節目とした政治闘争において突きたされた闘いの意義は、八〇年代中期、戦争遂行国家化とその体制の完成を急ぐ日帝・中曽根自民党政府による行軍攻撃天皇制の強化、右翼暴力団と連動したあらゆる国家権力に

よる反共、反革命攻撃に對し、先進的労働者を中心とした職場・地域における政治ストなど突出し、闘い十一・六を頂点として全國政治闘争などによって指導部、米白帝に屈服し一切闘いを放棄する中で、沖縄、福岡、大阪、名古屋など全國各地、地方、地区評が各々三千・五千名の規模の抗議集會を繰り広げ、下部から労働者の闘いと高揚、離反を促し、未だ規模こそ小さいが新たな労働者階級人民の深い部からの日米帝に對する革命的政治闘争の大爆発に向けた新たな動き、様相を示したことである。

われわれは、かかる闘いの意義をしかり打ち固めていかねばならぬ。

月、カールビンソン佐世保寄港を通した日米安保攻守軍事同盟化と、一日米艦三隻軍事同盟化と（二）時に、行事をテコとした「戦史の総決算」攻撃。目を世界転じれば、アキノ氏虐殺、K機事件、ランゲン爆発事案、米帝・レーガンのグレナダ侵略、バーニングIIの英西独備攻撃と重大な事件が相つぎした。他方、帝国主義の侵略革命、反動攻撃に對して、二三塚農民は三・八一七集会をもちり、一期実力阻止・磨滅むけた「歴史的脱皮」をかなりました。また、フィリピン

の全民労協の真公叛版の育成を押し進めてゐる。

このように、社会党・総評は「五五年体制」下の「平和と民

は、史上空前の反核反戦闘争が爆発し、ポーランド「連帯」もねばり強く闘かっています。

このように戦争と革命の要素が激突する中で、今日、日本労働運動は、全民労協の主導の下で、

問題であり社会党・総評が清算し、歴史的破綻の中にある「平和と民主主義」にとって代る、すなわち反帝闘争をめぐる新たな

一期の冬力
ンパの
共産主義者

それは、反戦反安保、改憲阻止、反行革、二里塚、反差別を闘い、全国的に労働組合運動を「新生」させ、内ゲバ主義、セクト主義を排し、共産主義者の団結と闘う闘戦線の結ぶを促していくことによつて闘いとられます。かかる困難な事業をやりぬくために、労働者、民に一時金カンパを訴へます。

カンパの送り先
東京都田区大森北1・13・11 赤路社
(郵便振替) 東京七十八六九四七

米日韓三角軍事同盟化を打ち固めたレーガンは、グレナダへの米軍の長期占領を決め、また本格的にレバノン内戦に介入し

レーガン来日後の情勢

八四年冬の闘いは、八〇年代
中期の日本階級闘争の激動と展
望ととして、重大な意義をもつ
であらう。今秋における闘いを
断頭としてうけつぎ、強め、そ
の圧倒的な前進をかちとってい
こう。そのためには、まずもつ
てレーガン来日訪韓以後の情勢
の特徴を確認していく必要がある。

情勢の特徴の第一は、日米韓三角軍事同盟化の政治・軍事的地位の決定的な上昇である。レーガンは、「米韓共同声明」の中において「韓国の安全が北東アジアの平和と安定の基礎であり、同時にアメリカの安全にとって死活的である」とのべ、「在韓米軍を維持し、能力強化に努める」とを宣言した。こ

われわれの相互防衛努力をより多く負担すること」であるという発言や中曽根の「日米安保体制は日本及び極東における平和と安全の基軸」といった発言を重ねあわせれば、日米韓三角軍事同盟化が、日米帝のアジア支配にとって決定的な位置と役割を占めつつあることは明らかであらう。

のあり方に係わり、日帝の体制
的危機と結びつきつつ、帝国主
義的「経済国家」から帝国主義
的「軍事国家」への転換を強制
している。現在、中曽根政府は
行革、生活破壊、改憲を強行し
ようとしている。中曽根は、そ
うした一環として今回の総選挙

(2面へ続く)

冬期一時金 カンパの訴え

共產主義者同盟

全その闘う労働者人民のみならず、わが同盟は、日帝打倒・米帝掃蕩の独樹立の下、日米韓僑軍事同盟化打破、改憲阻止、行軍粉砕、二重階級争勝、利・西貢租一掃、奇珍場解放を以て民は、レーガン訪比を實力で阻止し、闘いの中から、共產党を中心とした民族民主統一戦線をつくりだし、今日、マルコス打倒・民主・自決にあと二歩の地点にまでまっています。欧米で容赦愛国運動の方向へ転換しつつあります。また、これに連動して社会党は最後の金着板である「非武装中立」論を理念的課題へとまつりあげ、公・民に一層近づき、階級政党」から「勸

米帝一掃・プロ独樹立をめざす闘い行動する党」の創建です。それは、反戦反安保、改憲阻止、反行革、三軍廃、反差別を掲いで、階級的労働組合運動を「新生」させ、内ゲバ主義・セクト主義を排し共産主義者の団結と闘う諸戦線の結合を促していくことによつて闘いとられます。かかる困難な事業をやりぬくために、闘う労働者人民に一時金カンパを訴えます。

カンパの送り先
東京都大田区大森北1・13・
11 赤路社
(郵便振替) 東京七一八六九
四七

米日韓三角軍事同盟化を打ち固めたレーガンは、グレナダへの米軍の長期占領を決め、また本格的にレバノン内戦に介入しようとしている。こうして、レーガンは、パーシングIIの英・西独への強行配備と相まって、「対ソ同時世界戦略」の完成を意図している。

情勢の特徴の第一は、日帝と中曽根政府による急速な戦争と反動の「八五五年体制」作りである。

(2面へ続く)

部落解放運動の原点示す
足立区差別行政糾弾闘争

12・2 決起集会に四百名

パンフ『差別と逆流に抗して』から

の第一弾である。集会勝利にむけて最後まで闘いぬこう」という熱い提起があった。主催者挨拶にたった部落解放同盟東京都連足立支部長鈴木木氏や「足立区」と対策集会所裁判闘争を支える区会と相談役「市市氏は「足立区」の差別行政を糾弾し、解放行政を確立し、真の部落解放を、ちとつてよく」と闘う決意を表明した。

八年九月一四日、足立区行政は突如として「足立区における同和行政についての基本的な考え方」なるものをまとめ、集会所撤去・保育室「ななかま」の廃止・「同和」対策協議会の廃止を中心に、啓蒙関係以外のすべての事業を廃止するという方針を決定した。

区長名で集会所からの「退去通告」を送りつけてくる。

三月六日、足立支部、東京地裁に「集会所利用権確認」の民事訴訟をおこす。

五月一日、二百名を結集して「足立区同和対策集会所裁判闘争を支える会」が結成される。

十月十八日の葛飾区を皮切り

れる。(以上は、集会におそ
配布された『経過報告』とパン
フ「差別と逆流に抗して」を参
考にしました。)

意

義

足立区行政部の「九・一四

れていた。それは、日米韓三角軍事同盟化と行革をテコとした戦争と反動の「八五身体制」に延命の道を求める日帝の戦後体制の全面的再編に対応したものであった。

足立憲差別行政は、「地対法」にかくされていた牙がむきだしになった攻撃である。それが目

基本構想」 連を強化 組連西日本ブロック

部、村奈川、静岡の地方連絡会議の結成にもかかわらず、春闘や、政治闘争、全国二ニースの不十分性などが報告され、今後の方針化にむけて討議がなされた。主な論議テーマは、①結成段階で加盟した労組、活動家集団が、全国戦略としてどう位置付けるか、②大衆的登場（職場

にもビラまきをしていく必要があるのではないか」「官公労の職場では動けない状況もある。地域での労組連建設と結びつけて考えたい」「全国的に取り組める課題を設定、例えば全金大阪の道下裁判官の不当労働行為署名など」「春闘での全国統一ビラ、こうした意見も突っ込んだ論

所前に移して、集會を繼續し、代表團と交渉報告を受けた。五時、北七駐駒前まで、足立支部を先頭に三宅に出発した。「足立区差別行政糾弾」の声は、歳末の町に力強くこたえました。

一六回　その他、演義、職場
学園でもたれた集会をさあわ
せると二〇回以上に及び、のべ
動員数は、千名超えた。

十一月八日、足立区役所
「話し合いは継続していくが、
九・一四決定を修正する可否を
などについて、具体的なことを
話し段階ではない」との発言。

十一月八日、足立区差別行政

への「同和」行政の転換がある。この「地対法」は、部落解放同盟が先頭に立ち、自民党・政府との闘いの通して、制定が待ちとられたものであり、闘いの成果といえる。しかし、この「地対法」には、「同和対策」の名称を削除し、かわって「地域改善対策」とした点に端的に示される様に、融和政策・部落解放

作り上げ
しよう!!

や、統 労組連系の「全民協
反対派も多数であり、総じて、
総評の分裂ではなく、解体の方
向へ向かっているといえるだろ
う。

こゝした激動の情勢のなか、
全国労組連は、十一月五〜六日
の東日本ブロック会議、十一月
二六〜二七日の西日本ブロック
会議が開かれた。

団 地域活動家集団 合同労組
寄せ場など様々な労働組合組織が
分散をまとめ上げる旗印。地方
建設への積極性・責任・必要
だと思ふ「財政問題」についても
一〇二万円まで、労組活動
家集団とは分けてもよいのでは
そして確実に納入を、労組連加
盟組合や仲間の間に對して見
える形で支援を「ウパ・旗

内政には軍事国家化へ向け
制つくり。田中判決をきつ
てした衆院解散。総選挙に
て、戦後政治の終決算」
り押し。11月3・4日の山
おける問答無用の労働者大
捕等々。情勢はきびしく劣

東部連

裕会が決起

撃に対する反撃が呼びかけられた。民間の仲間からは、障害者差別組合つぶしに反対し直民の団結をと呼びかけられた。

に連帯し、大衆行動を強め、勝

起集會

11・22

働者への差別、分断攻撃や、軍
 拡充などの敵からの攻撃に断固立
 て向かう。個別の職場闘争をて
 いねいにやりきり、それを基礎
 は、闘いを放棄するまでの後退

けれども、積極的に時代を切り開いていこうとする熱意と実力が今こそ問われている。東の働く仲間はその決意を我々示してくれた。

下町東京東部の江東区
葛飾区において、1月22日に、
総決起集会が行われた。
は右翼野戦に敢然と立
かっている東部連合会議で

にその態度を問いつめてゐる。

この日、東部連絡会議を先頭とする結集した百数十名の労働者はきつぱりと、反動の流れ

始まり、来賓の横山好夫氏、市川誠氏の挨拶の後に、各労組の力強いアピールが続いた。宮公労の仲間からは、行革合理化攻

そして、その中身として、情勢に機敏に対応し、反撃する労働者階級の主体的力量の強化。行革・労働再編・合理化などの労働

した地域共闘の強化などを打
出された。

最後に山谷での労働者大量逮
捕に抗議する抗議文が採択され
階級的労働運動の道は険し

東部連絡会が決起集会

11-22

日帝は、戦争遂行国家体制^{（一）}いわゆる「85年体制」に向けてあらゆる方面で着々とその準備を進めている。その一つとして、女性労働者に対する労基法改悪攻撃^{（二）}「保護」抜き「平等法制定策動がある。一九八一年五月、芳相の私的諮問機関である男女平等問題専門委員会は「雇用に於ける男女平等等の判断基準の考え方について」なる報告を行い、男女平等のガイドラインを示した。この報告を受けて、労働省は婦人少年局に「男女平等法」制定準備室を設置し、「平等法」法制化への体制作りを急いでいる。

帝国主義の危機は世界的な規模で進行し、史上二度目の、資源と市場をめぐる再分割戦が火

を吹きはじめてゐる今日、「雇
用平等法」をめぐる動きが何を
示しているのか、しっかりと
つかまなければならぬ。女性

労基法改 アジア 戦争へ

差別を大いに利用し、女性労働
者をふるいわけ、戦争への道へ、
「女性の役割」を有効に再配置
しようとしているのが、そのね
らいである。労基法改革攻撃

アジアの女たちと手をつなぎ
戦争への道断つ女性の隊列を

「保護」抜き「平等法」制定策
の女たち
の道断つ
悪——男女属
てはならない。七〇年代後半
ことであり、このことを見落
「保護」抜き「平等法」制定策
の女たち
の道断つ
悪——男女属

の能力開発路線にかゝり、女性労働者の闘争を、法制運動に流しこみ、切り縮めて傾向に對して、女性解放運動の能力を開発路線にかゝり、女性労働者の闘争を、法制運動に流しこみ、切り縮めて傾向に對して、女性解放運動

用平等法粉

こと手を

女性の階

とは民主主義運動のみではな

やや

機構

行

さ

化

関係のない状況に女性労働者

[illegible]

化に反対し立ちあがった労働者を闘い等々が、そのを示している。

こつてとりわけ労働法改革、用平等法、制定、炭動粉砕闘つてゐることは、七五

際婦人年々キシコ会議において、第世界の女性達に

て、帝國義本國における達に向けられた厳しい批判

弾を受けつゝめ、闘わねばな

いといふことである。西欧

イギリスのグリーナムコモ

はじめとて反戦反核反基

争の先頭に女性が立つてい

松達も帝國義本國の女性

省の實務として、アジアの

ちと手をなすために、戦

の道を許さない女たちの隊

強固につくり出そう。

全部・全国へと「同和」行政の縮小・打切りを拡大させ、そうして、日帝主導による融和事業執行体制を再編・確立し、融和運動の本格的育成を聞、部落解放運動の懷柔、解体をはかり、放逐運動の懷柔、解体をはかり、部落大衆を再び戦争「排外義勇」へ動員していくことにある。

それ故、足区差別行政を糾弾し、解放行政の確立をめざす闘いは「対対法」の牙闘し、その根定に今日の帝制の小生代部落政策と真向う対峙し、粉碎していく闘いのである。この闘いには、利権屋がはきりこむ余地がない。ここには、自立、自闘という部落解放運動の原点があり、初期の狭小な闘いのような闘う部落大衆と闘う労働の生きた結合がある。われわれは、足立支部と「支さる会」の闘い

「我々の
全国労組」

11.26～27 労

全国労組・活動家連絡会議は、「全労協」に反対し、階級的労働運動の旗を掲げてから一年が経過した。

この一年は、総評民闘の十六単産九八万人が全労協に参加し、八四春闘も全労協を中心に、中曽根内閣登場以降の行革攻勢による賃金労の右旋回、御用組合との合併話などが急ピッチで表面化してきている。

レーガン来日・訪韓に対して

地方からの報告の特徴点は、①加盟労組・活動家集団が、準備会議や、労働講座^(*)、争議支援、合同労組などとしての活動との交流、パイプ作り、③労働情報労組連と不明確な運動化への危惧であった。

出された意見などで積極的なものをあげると「単産や左派グループに参加のころは、支部や分会の活動家を紹介し合い、地方建設に結びつける」全国的な争闘・組合の交流会を開催「結成時の基調は認識統一であった。我々の基本構想（労働者の綱領）を世話人会で積極的に全

(※) 糸巻佳伸の強化、④春闘や政治闘争方針の具体化、共同行動などであった以下、西日本ブロック会議での内容の報告を行う。

いふ次元にとどまらず、
いう次元にとどまらず、

全民労協は、「八五年を目途に」連合会の移行の事務局案は運動方針では期日早かったが八七年の国際自労連大会までには「連合会」に、加盟するという方針はレル上のものである。そして、侵略戦争に加盟し、労働者階級の利益ではなく資本主義的制をえ、労働者を戦場と軍事監獄へとつれて行く」としてゐる。

中曽根内閣の登場は、この事を示している。これまで通りのやり方は通用しない。全民労協は、その路線としての「基本構想」を待っている。我々は、社会主義めざす、われわれの基本構想をかかげ、大胆に闘い組織した全国労組連の前進こそ急務であらう。

「我々の基本構想」作り上げ 全国労組連を強化しよう!!

11.26～27 労組連西日本ブロック会議に参加して

地方からの報告の特徴点は
①加盟労組・活動家集団が、
備議や、労働講座、争議
援、合同労組などとしての活
②労研センターに結集する部
との合流、パイプ作り、
③労働者組連と不明確な運動
への危惧であった。
出された意見などで積極的
ものをあげると「単産や左派
ループ参加のころは、支部
分会の活動家を紹介し合ひ、
方建設に結びつける」全国
争議団・組合の交流会を開催
「結成時の基調は認識統一で
った。我々の基本構想（労働
綱領）を世話人会で積極的に

という次元にとどまらず、

全民労協は、「八五年を目途に連合会への移行」の事務局案運動方針では期日を定めたが八七年の国際自由連大合会には「連合会」にし、加盟主という方針はレル上のものである。そして、侵略戦争に加わらず、労働者階級の利益をなす資本主義体制をえ、労働者戦場と軍事監獄へとつれて行くとしている。

中曽根内閣の登場は、このを示している。これまで通りやり方では通用ない。全民協は、その路線としての「基本構想」を持っている。我々は社会主義をめざす、われわれ基本構想をかかげ、大胆に組織しうる、国労組連の前進を義務であつた。
